

あかしびと

95号 イースター号 2016.3.27 発行

日本バプテスト同盟 金沢文庫教会

〒236-0046 神奈川県横浜市金沢区釜利谷西 3-36-20

☎/Fax 045-783-5475 牧師：森島牧人・恵 名誉牧師：白根新治

「啐啄同時」

三月は、卒業の季節です。院長として法人の責任を担っていた時には、こども園、小学校、高校、大学と、学院内七校の卒業式に出席していました。

この卒業の「卒」という漢字に口偏がつくと「啐」、これは鶏の卵がかえる時、殻の中で雛がつつく音という意味になります。「啄」は母鶏が殻をつつく音です。啐啄同時（そったくどうじ）という言葉は、卵の中の雛に母鶏が、「そろそろ自分の力で殻を破り、かえる時が来たよ。」と外側からつついて知らせる時をあらわしています。母鶏は決して慌てません。外から無理矢理にこじ開けると、雛は決して強く育たないからです。球根も同じです。芽が出そうになっているとき、助けるつもりで手を出しては綺麗な花は育ちません。枯れてしまいます。親鳥は優しく卵の雛に、「コツコツ」とつついて時を伝えるのです。すると、卵の中の雛は、母鶏のこの「啄」に応え、今度は懸命に自分の力で内側から卵をつついて割り、雛にかえろうとします。これを「啐」と言います。

ですから「卒業」とは、「今までいた自分の世界の殻を、自分の力で打ち破り、新しいもっと広い世界と出会う」ことなのです。そのためには同時に「母鶏の外からの『啄』の業が必要」なのです。時を知らせる「コツ、コツ、コツ」というくちばしの音が聞こえますか。殻を割る準備は出ていますか。新しい世界が見えますか。

皆さんはこれまで何回もの卒業式に臨んで来られると思います。大学生ならば、もしかすると、「勉強はもう終わった」と思っているかもしれません。確かに学校での勉強は終わったかもしれません。私のようなものでも、もうすぐ完全退職の時を迎えます。会社の仕事は終わったと思う方もおられるかもしれません。しかし、人生に終わりはありません。ある意味では、これからが本当の学びをする時です。

森島 牧人(牧師)

学校教育とは一個の人間に「生きる力」、「共に生きる力」を付与する活動ですが、教会での学びは、「長子であるイエス・キリストに与るものとして、神の子どもとされる」ために、つまり神と共に「永遠の世界」を生きるためになされるものです。

ご自分が生徒・学生であった時代を思い起こしてみてください。わたしたちは長い学校生活の中で、「蓄える力」としての学力を求められてきました。一般に、たくさん蓄えている学生は良い学生と評されます。もちろんそこに詰まっているものは「知識」であり、その主人公は「頭」です。確かに生徒・学生時代の多くは、この蓄える力を求められ、時に知識の量でその人間存在自体までも評価されることがあります。しかしそれはまだ「潜在能力」としての力であって、「働きとしての力」とは区別されなければなりません。

聖書はこの二つの力を、明確に区別しています。そしてその繋がりをも教えます。聖書はこの「力」を表す場合、「ドゥナミス」と「エネルゲイア」という二つの言葉を区別して用いています。ギリシャ語のエネルゲイアは「en(at)+ergon(work)」,つまり「活動している」という意味をもっています。「ドゥナミス」は「ダイナマイト」の語源で、「内に蓄えられた力」を表します。川を堰き止め、ダムを築き、そこになみなみと水が湛えられている状態は、私たちにある種の力を感じさせます。川が堰き止められ、なみなみと貯められたそのダムの口から実際に水が注ぎ出され、タービンが回って家々に明かりが灯る時、私たちはそこに「エネルゲイア＝働きとしての力」を感じるのです。

学校を卒業する学生は、これから新しい世界に出て、一個の人間としての、トータルな意味でその存在が問われます。人の持つ力のもう一つの要素、「働き」としての力

(エネルギー)の重要性を知る事になるからです。自分が身につけた能力(ドナミス)を、自分の置かれた場で最も価値の高い仕方で適切に働かせることが出来るか、という観点から一個の人間のトータルな力(エネルギー)を評価しようとするからです。この「働きとしての力」(エネルギー)は、「量」ではなく、その「方向性」が最大の問題となるのです。自分もまた周りも幸せになるためには、自分の力(ドナミス)を、どの方向にどのように働かせたら良いのかと言うことが、最大の関心事だからです。世の中はこの「方向性」にとっても敏感です。つまり、どんなに多くの知識が蓄えられているとしても、その力を働かせる方向が少しでも狂っていると、人々は容赦なくその人を糾弾します。その時、人々は、「あなたは知識が足りない」とは言いません。「あなたは、知恵が足りない」と評するのです。知識と知恵とは違うのです。「Knowledge」と“Wisdom”は違うのです。「知識」に必要なものは「量」であり「頭脳」の問題ですが、「知恵」に必要なものは、「方向性」です。どの方向に、どのように働かせたら価値があるのか。つまり、「価値観」の問題なのです。それは、頭脳の問題でなく、「心」の働きなのです。

教会での学びとは、キリスト教の教育とは、聖書の知識を蓄えること(ドナミス)ではないのです。自分も、神さまがイエス・キリストを十字架にかけられるほど愛しておられる私たちの周囲の人々も共に幸いとなるためには、自分の力(ドナミス)をどの方向に、どのように働かせたら良いのかと言うことが、最大の関心事だからです。つまり、私たちに示された神さまの愛、イエス・キリストの出来事、十字架と復活の出来事の前に、私たちは問われているのです。

神さまの「コツコツ」と叩かれている音に、応えるのは私たちなのです。私たちの心の扉に、神さまの「啄」、
「コツコツ」が聞こえますか。私たちの「心の殻」を破るのは、私たちの能力を自分のためにのみ蓄えるのではなく、自分の家族に、社会に、世界に働きかける力とするのは、「啐」なのです。私たちの信仰の力、愛なのです。



目 次	
啐啄同時-----	森島牧人(牧師) ----- p. 1
近況報告-----	白根新治(名誉牧師) p. 3
白根名誉牧師の若き頃の信仰自叙伝 (その2) -----	編集(羽入田 毅)---- p. 3
赤坂教会から文庫教会へ-----	西山律子 ----- p. 4
(創作) ポンティオ・ピラトの独白 -----	羽入田悦子----- p. 5
どら焼きの美味しい食べ方 -----	白根義輝 ----- p. 6
父からのひとこと -----	森島 豊----- p. 7
イースターって何? -----	勘田義治 ----- p. 8
台風の日、地獄と天国、そしてまた地獄・・・-----	犬塚志朗 ----- p. 9

近況報告 (2016.2.29 現在) 白根新治

昨年10月25日の名誉牧師就任式から早4か月が経ちました。皆様、いかがお過ごしでいらっしゃいますか。主任牧師退任後は、長年に亘る責任から解き放たれ、気が抜けたせいか、自宅でのんびり暮らしております。健康状態で特に大きな問題があるわけではありませんが、2週に1度、かかりつけの医院で定期健診を受けています。

また、2月9日より、家内がお世話になった介護老人保健施設「ふるさと」に、週2回デイケアに行き始めまし

た。マイクロバスの送迎サービスがあり、9時から16時の間、リハビリやリクリエーション、入浴などを行っています。年齢相応かもしれませんが、歩行が思うに任せない状態でしたが、リハビリの成果か杖の助けを借りながらですが、一人で少し歩けるようになりました。暫くの間リハビリに専念し、再び皆様と共に礼拝を守りたいと願っています。

皆様の上に、神様の豊かな祝福がありますようお祈りしております。

信仰自叙伝(その2)



当時の白根新治牧師

5. 人はその友によって人生航路を左右される事がある。昔から友達を選びなさいと言われるのは、深い理由があつてのことだろう。教会に来る人の動機を調べてみると、友達に誘われて来たという人が案外多いし、また一番永續きする。かくいう私もその一人である。中学3年の初め、しばしば誘われていた横浜戸部教会(注1)の門を、処女地に足を踏み入れる探検家の胸のときめきにも似た思いでくぐった。汚く小さい教会だった。20数名の小中学生が楽しそうに歌っており、なんだか恥ずかしかつた。牧師は三井 勇(注2)という若い牧師だった。この牧師はあまり勉強しなかつたらしいが、実に親身になって若者の面倒を見ていた。私は数回通ううちにすっかり好きになってしまった。(1961・7・9)

6. 今の人は、教会というと実に堅苦しく考えるが決してそういうものではない。真実と愛を基礎とした交わりは、清らかな谷間の水を思わしめる。しかもそこには、心の底からの笑いがいつも渦巻いているのである。牧師の

名誉牧師白根新治

三井先生は大変歌の上手な人でよく歌つたものである。少年部歌というのがあつてなんでも先輩たち(現東大教授木村健二郎先生、故藤田少佐一航空機により世界新を作つた名パイロット)が少年時代に歌つたものだそうだが、戦時中ラジオで放送した事がある。また、この牧師は飯よりも若者の面倒見が好きで、そのためかふるわぬ基督教会にあつて異色の存在であつた。この牧師にだんだん心をひきつけられて、やがてとりこなつてしまつたのである。(1961・7・16)

7. ギボンのローマ史を見るとキリスト教徒迫害の歴史が書かれている。日本でもザビエルの伝えたキリシタンは、秀吉・家康によって禁じられそのため多くの人々が殉教の死を遂げるに至つた。長崎の26人の処刑は世界的にあまりにも有名である。あの当時のような迫害は無いにしても、有形無形の圧迫はかなりあつた。日本精神を注入する運動が盛んに行われていたので、キリスト教精神を馬鹿にする風潮があつたことは否めない。やがて教会の中にも危機が生まれ始め、礼拝形式も変つた。(1961・7・23)

8. 教会の礼拝では、先ず君が代の斉唱・宮城遥拝があつてそれから讚美歌を歌つたのである。特別集会でもあつると、必ず特高警察が来て会衆の数や階層、話の内容などを調査して帰つていった。ところが武藤 健牧師(注3)がこられて「五族の父」という伝道説教をしたとき、調査に来た警官が話にすっかり感心してしまつてそれから数日、一求道者として出席していた。子供心に、真理が力を発揮すると、人間には考えられない奇跡が起こるものだと感じたものである。(1961・7・30)

9. パウロの伝道によって多くのキリスト者が生まれたように、中年の教師の指導によって若き兄弟姉妹が洗礼を受けた。私もその一人である。中学4年の6月、丁度ペンテコステ(五旬節)の日であった。その日、外はよく晴れわたっていたがなんとなく落ち着かずソワソワしていた。荘厳なオルガンと共に礼拝が始まり洗礼の式となる。「我父と子と聖霊の御名により汝にバプテスマを授く アーメン」と牧師が言いながら水を頭上にかけて手を置いて祈った。水が頭から流れて顔・首へとたれる。瞬間、何とも言えぬ喜びに満たされる。どうしたことか無性に泣けて仕方が無かった。これが新生の喜びというものか。(1961・8・13)

10. 洗礼と聖餐とは教会の二大礼典である。しかし、洗礼を受ける事について、今日多くの人々の立場によって解釈が違うようだ。無教会の人々は形式的なものはいらないといって敢えて無視しようとする。カトリックは洗礼を受けていないと天国に入れないので、死んだ人にもあるいは瀕死の重病人などそれを好むと好まざるとにかかわらず洗礼を施すのである。自分が好まないのに押し付けられてしまうのは、決して後味が良いものではないだろう。勿論私が洗礼を受けたのは、主イエスが神の子であるのに人の子として正しい事をするのは当然である、と言ってバプテスマのヨハネから受洗をされた謙虚な態度に打たれて、自ら進んで洗礼を受けたのである。(1961・8・20)

11. 洗礼を受けてからどう変わったかとよく人に聞かれる。私はこれに対して何と答えてよいか一寸困る。ただ洗礼を受けた当時は、物皆美しくどこにも目を移す所そこに神の力が溢れているように思い全てが感謝であった。人の過誤も容易に許せし自ら苦行を買って出る。は

た目からみればお人よしのお目出度い人物に見えただろう。けれども他人がどう思おうと何の頓着も無かった。この点は仏教徒であった私の両親も認めていたらしい。もう一つ良い点といえば、与えられた仕事に対して責任を持つようになった事だ。考えてみればあれもこれもと感謝は尽きない。(1961・8・27)

12. 信仰生活で一番恐ろしいのは独断に陥る事であろう。そして、そこからいつのまにか信仰的傲慢になることである。自らは罪人の頭であるのに、その意識が免疫になるとキリストを必要としなくなる。キリストを後退させて自分が前面に出てくる。長い教会生活を送っている人でも、教会の役員にならないと礼拝に出て来ない等というのはその類であろう。そこで、生ける信仰には常に悔い改めがなければならぬのである。(1961・9・10)

後記：今回は1961年7月9日から9月10日までの教会週報に掲載されたものをここに転載した。

羽入田 毅

(注1) 現在の横浜上原教会

(注2) 1906年～？ 戦中、戦後にかけて牧師、著書「われらは無益なる僕なり — 牧師三井 勇の歩んだ途」

(注3) 1989年～1974年 日本メソジスト教会などの牧師を歴任、第4代日本基督教団議長、キリスト新聞設立



2015.10.26 撮影

赤坂教会から文庫教会へ

西山律子

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただの一粒のままである。しかしもし死んだなら豊かに実を結ぶようになる。」

ヨハネによる福音書 12:24

これは夫の父の愛誦聖句ですが、父の死後、夫と私、夫の母、妹、妹の息子、弟、弟嫁が救われました。

40年ばかり前、父が広島から私たちの家に来てくれ、私たちの幼い3人の息子を、それはそれは優しく、かわいがってくれました。その父が穏やかで、おとなしい人なので、つつい育兒その他もろもろの気持ちをぶっつけました。私は自身をやさしい心の持ち主で、他人に悪いことなどするはずはない、誰にでも親切にできると思い上がっていたのに、悪魔のような心で父に接していました。今日から反省して

よい心の持ち主になろうと思っても、どうすることもできません。

こんな意地悪な私のことを夫や近所の人に一言も言わない父のことが不思議でした。自分の心が汚いのでだんだん落ち込んでいきました。泥沼のような真っ暗な心で毎日を過ごしていました。

その頃父は広島と同級生・井上哲雄牧師の赤坂教会に通っていました。が、父の亡くなる日までキリスト教のことは、ほとんど知らないでいました。義父の葬儀をキリスト教式で行い、教会の方達に、お礼のあいさつに伺ったのが教会に行った初めでした。それから私達も教会に通うようになりました。

行くたびに顔がくしゃくしゃになるほど、涙が出て止まりませんでした。「すみません。悪いことばかりしていました。許して下さい」と祈りました。神さまはいつも、もういいよ、もういいよと優しく許してくださるよう感じました。洗礼を受け少しずつ聖書のみことばが心に入るようになりました。

洗礼を受けて間もない頃、目がほとんど見えなくなりました。イチゴは真っ黒に見え、電話番号もほとんど見えなくなりました。が、一年くらいで元に戻りました。その間カセットテープで説教や讃美歌をたくさん聞きました。とても平安な毎日でした。主がともにいてくださったのですね。

子供たちと教会の帰りに赤坂から渋谷まで歩いたり、途中で昼食を摂ったりしていたことが、今懐かしく

思い出されます。何年も生ぬるい信仰生活が続きました。夫は歳を重ねるにつれて高速道路を使って、毎日曜日、運転することの不安が強まり、近くの教会に行きたいと話し合うようになりました。そして夫が参加しているギデオン協会の諸行事を積極的に応援して下さっている白根牧師の教会に導かれました。

力強いメッセージとお祈りに励まされ、文庫教会の皆様のおかげに触れることができました。それから間もなく就任された森島牧人牧師・恵牧師のメッセージで、心躍るような、体中の血が新たにされるような喜びに満たされました。そして昨年12月20日、文庫教会への転入が許されました。

今、毎聖日、そして「聖書をひもとく会」の日が待ち遠しくてたまりません。

「神様がなさることは皆、その時にかなって美しい。」

みことばのとおりです。赤坂教会から、この文庫教会へ、神さまが植え替えて運んで下さったと強く思われます。

どうぞよろしくお願いいたします。



創作 ポンテオ・ピラトの独白

羽入田悦子

あの男がよみがえったという噂があるが……。 どういうことなのか。あの時、あの男はゴルゴタの丘の十字架の上で、確かに息絶えたはずだ。

何故ならあの日の夕方、男の仲間から遺体を引き取りたいとの申し出があった時、男の死に不安のあった私は百人隊長に申しつけて、何度もその死を確認させた後、その許可を出したのだったから。さらに次の日の朝には、遺体が盗まれるのを案じてやって来た祭司長達やファリサイ派の者達の、墓を封印し見張りの番兵をという要請にも応えて、それを認めたのだ。にもかかわらず一体何が……。

あの男が私の前に引き出されて来たのは、過越の

祭りの前日、20日ほど前のことだ。思っていたより若い印象のその男は、兵士達の手荒な扱いによるめきながら私の前に立った。そして真っ直ぐ私の方を見た。実を言うとその男と目が合った瞬間、私は怯んだのだ。ローマ総督のこの私が……。

うまく表現出来ないが、崇高な眼差しとでもいうのか、いずれにしてもあのような気高く澄み切った眼差しに私は未だかつて会ったことがない。その眼差しに悲しみの気配を漂わせて、男は私の前に立っていたのだ。

私はこの男にすべてを見透かされている……。瞬時にそれに気付いて、私は狼狽えた。今思えば、あの時あの男と対峙して、たじろがぬ者など一人とてなか

ったであろう。そしてその瞬間は、私がああ男の無実を確信した瞬間でもあったのだ。

事実、いく度祭司長や律法学者等の訴えを聞いても、この男に咎められるべきことなどどこにも見出せなかった。ヘロデ王も私と全く同じだったのである。

私は何度も男に弁明するよう勧めた。だが男は「私は真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」とのみ静かな声で話し、「真理とは」との私の問いにも無言だった。

外では、祭司長等に操られた群衆の「イエスを死刑に」という声が高く大きくなる一方だった。何より私を驚かせたのは、ついこの間ろばに乗ってエルサレムに上って来るこの男を、木の枝を振って熱狂的に迎えたはずの民衆の大半が、この日は打って変わってこの群衆の中に加わり、共に「イエスを十字架に」と叫んでいるという恐ろしい現実だった。

男の釈放を促す私の三度の声も、興奮した群衆には届かず、祭りの慣習を用いての作戦も「バラバを釈放し、イエスを十字架に」の声に掻き消されてしまったのだ。

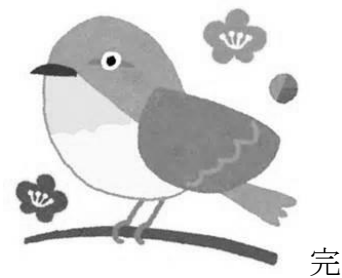
結局、騒動が大きくなるのを恐れた私は、すべての責任は扇動された愚かな群衆の上にごそあるのであって、私にはないと自分にいい聞かせ、総督としての正しい判断を避けて群衆の望みどおり、男を磔刑に処したのである。

後味の悪さはあったが、先ずは一件落着となるはずだった。だがそういう訳にはいかなかったのだ。というのは、あの日以来私は男のあの眼差しに悩まされ続けることとなったのである。執務中であっても、どこで何をしてもふと気が付くと、男のあの深い眼差しが私を見つめている。恐怖に戦って振り払おうと頭を掻き振り、身を振ってもがいた回数は数え切れぬ。だが何をしてもあの眼が私を捉えて離さないのだ。

イエスと呼ばれていたあの男は、本当にキリストすなわちメシアだったのか。よみがえったというのは、男が予告していたとおり復活したということか。もしそうなら、メシアを磔にした私はどうなるのか。頭がおかしくなりそうだ……。さてよ。そうだ。私はローマ人だぞ。ローマ人の私にユダヤ人のメシアなど、どんな関係があるというのだ。思い悩むことなどないのだ。ばかばかしい。いやしかし、この考えは残念だが間違っているぞ。ローマ人であろうとユダヤ人であろうと、メシアであろうとなかろうと、罪の一切がない男を保身のために群衆の手に渡した私の罪業は、何をもってしても償うことは出来ぬのだ。

だが、耳に挿んだところによると、男は十字架上の苦しみの中で「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです。」と祈ったという。もし「彼ら」の中に私も入れてもらえるなら……。いやいや、私の場合「知らなかった」という訳にはゆかぬだろう。男が何者であるのかはともかく、無実であることははっきりと知っていたのだったから……。

苦しみもがいて疲れ果てた私に、なおも注がれる眼差し。だが気付いてみれば、どうしたことかその眼差しは、限りもなく哀れみと慈しみに満ちていて、呆然と立ち尽くす私の耳に私の名を呼ぶ微かな声が、ああ、忘れもしないあの男の声だ。とうとう私は狂ったのか、そうなのか。いやそうではない。断じてそうではない。確かに、確かに聞こえるのだ。「ピラトよ……」と私を呼ぶ静かな声が……。



完

どら焼きの美味しい食べ方 白根義輝

子どもが好きな遊びの一つに「なぞなぞ」があります。大人になると、日本テレビの笑点でもよくやる「なぞかけ」に発展していき、大人も子どもも言葉遊びで楽しんでいます。

以前、1年生の女の子から、「1と5を足すとどんな果物になるか」となぞなぞを出されました。なぞなぞ入門

編のような問題ですが、その子にとってなぞなぞは、新鮮な遊びだったに違いありません。覚えてたの問題を友達や先生に出してみたかったのでしょう。なぞなぞの難易度も経験や語彙の数、成長と共に高くなってきます。私が良く覚えているなぞなぞの一つに、「立つと低くなって、座ると高くなる物何だ？」があります。お分か

りになりますか。

次に、最後のなぞなぞを紹介して、今回お伝えしたい本題に入っていきたいと思います。

アニメのドラえもんを知らない人はいないと思いますが、ドラえもんの大好物はどら焼きです。そこで問題です。ドラえもんは、どら焼きの皮とあん、どちらが好きでしょうか？これは、ドラえもんの歌の最後の部分を知っていれば、簡単に答えられます。

♪こんなこといいな、できたらいいな・・・あんあんあん、とって大好き、ドラえもん♪

このなぞなぞを出されたとき私は、主題歌を口ずさみながら考え、自信をもって、「あん」と答えました。すると、「残念でした、不正解」と言われました。

あんがとっても大好き、と歌っているから正解じゃないの？と訴えたところ、あんあん、と(取)っても大好きという意味だから、皮のカステラの方が好きなんです、とやり込められました。二通りの答えがある何とも巧妙な問題でした。

いずれにしても、どら焼きの皮とあんを別々に食べる人はいないでしょうし、よしんば食べたとしてもどら焼き本来の美味しさを味わうことはできません。

以前、あるクリスチャンの方から、罪の赦しは信じるが、復活は聖書を書いた当時の記者が、希望的観測をもって記したものだから受け入れない、と発言されたのを聞いてびっくりしたことを覚えています。

では、自分はどうだったのか思い出してみますと、バプテスマを受けた時、長きに亘り神様から離れていた罪が赦され、重荷から解放された喜びで一杯でした。何をしても嬉しさが込み上げてきました。では、復活についてはどのように考えていたかという、皆無に近い状態でした。

その後、家族や知人の召天を通して、死の問題、体

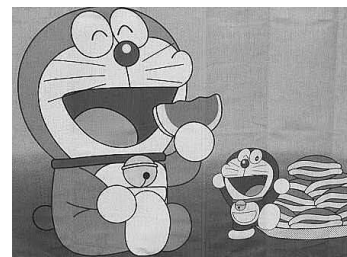
のよみがえり、復活について考えるようになりました。私たちの罪を赦すためにイエス・キリストが十字架上で代わりに死んで下さり、三日後によみがえられました。この復活がなければ、私たちの救いは完成しないことに気づかされました。

ローマの信徒への手紙 10 章 09 節に、「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。」と記されているとおりです。

また、コリントの信徒への手紙一 15 章 12～14 節では、「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」と迫ってきます。

罪の赦しと身体によみがえりは、丁度、どら焼きの皮とあんのようなもので、切り離して考えることはできないセットです。私たちの信仰が無駄にならないためにも両方いただき、永遠の命の恵みに与りたいと思います。

イエス様を救い主と信じてバプテスマを受けるまでの道は、一人ひとり違いますし、その後の信仰生活や体験と結びついて御言葉が理解できることもあります。まだまだ分からないことだらけですが、イースターを迎えるレントの時、改めて十字架と復活について考えてみました。



父のひとこと (幼稚園への寄稿文)

< 重荷から自由にする言葉 > 森島 豊

「あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えてくださる。主は従うものを支え、とこしえに動揺しないように計らってくださる」(詩編 55 篇 23 節)

この言葉は、私の好きな聖書の言葉の一つです。仕事や子育ての中で自分の思い通りにいかないことが起こります。そこで<自分がやらなければ>という思いに支

配されると、だんだん重荷になってきます。それが積み重なると思い煩いになり、心病んできます。自分の子育てに自信を失うこともあります。仕事が忙しいと、家族に申し訳ないという思いでいっぱいになります。そんな時にこの言葉をよく思い起こします。「あなたの重荷を主にゆだねよ」。

よく考えると、自分が頑張れなくても、太陽は昇り、陽はまた沈みます。自分が力不足でも、不思議に子どもは育ってくれます。自分の思いを超える存在があることを知ると、肩の荷が降りることがあります。同じ課題に取り組むとしても、＜自分がやらなくては＞という思いから自由になって改めて向き合うと、動揺することがあっても、しっかりと立つことができます。

大事なことは、自分を自由にしてくれる言葉を聴くことだと思います。人に相談をするとき、私たちは自分たちを重荷から自由にする言葉を求めているのだと思います。「あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えてくださる」。思い煩いから自由になろう。もし自分の判断が間違っていたら、神さまが正しい道に連れ戻してくださる。だから、今自分が最善だと思うことを全力で取り組もう。この言葉はそうのように自分を前向きにさせてくれます。

最後に、もう一つ私の好きな聖書の言葉を紹介して結びとします。皆様のそれぞれの子育ての歩みの上に、神の祝福を祈ります。

「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです」。(ペテロの手紙一第5章7節)

* 森島 豊先生：森島牧人・恵牧師の次男，青山学院大学宗教授主任として活躍中。この原稿は，次女の幼稚園（キリスト教の園）の卒園文集に寄稿した「父のひとこと」です。本人の了解を得て、『あかしびと』に掲載させていただきました。



イースターって何？ 勘田義治

イースターはキリスト教の一番大切な行事であるにもかかわらず、クリスマスに比べるとさほど注目されていないのが日本の現状です。名前だけは知っているけれどイースターって何？という日本人も多いことでしょう。クリスマスの起源は太陽崇拝にあるといわれ、キリスト教の教えでなく異教に起源を持つことは広く認められています。新約聖書にはイエス・キリストの誕生日を特定する記述は無く、祝う習慣は聖書の教えではないとされています。そのためか教会がその歩みを始めてからクリスマスを正式に祝うようになるまで、数百年を要していますが、一方でイースターは初期キリスト教時代から多くの教派で教えの中心的内容とされてきました。

イースターは言葉としては後の時代に使われ始めたようですが、祝祭としてはキリスト教の発祥とほぼ同じ頃に始まったと言われています。使徒パウロがヘレニズム世界にキリストの福音を宣べ伝えたとき、死者の復活の使信は人々に大きな衝撃を与えました。基本的に靈魂の不滅と輪廻転生を思想の基調として受け継いだギリシャ人の多くはこの教えに最初は矛盾を感じたかもしれませんが、パウロはイエスの死こそ神の自己犠牲であると考え、神の自己犠牲によってのみ人は罪から解放されると説きました。つまり人は自力では救われることが

ないが故、神の恩寵によってのみ救われるというイエスの教えを信じ、実践することで新しい生を迎えることができると考えたのです。

20世紀に入り、キリスト教の中にパウロの教えを忘れ、死後の「靈魂の不滅」を信じる者が現れたとき、フランスの神学者オスカー・クルマンは、パウロの教えを起点とする正統派の教義とは「肉体の復活」を信じ、死後の「靈魂の不滅」を教えているのではないと自著『靈魂の不滅か死者の復活か』で痛烈な批判を行いました。ソクラテスの死において、プラトンにより美化された靈魂不滅の思想では肉体は靈を閉じ込める牢獄であり、人は死ぬことによって靈を解放できると考えられました。永遠に死なない靈魂の不滅こそ古代ギリシャ人の目指すべきものでした。いつの間にかこの思想がキリスト教信仰の中に入り込み、肉体の復活を告白するはずの信徒が靈魂の不滅を信じるようになったと彼は批判したのでした。

ところで私が通い続けたタイとビルマ(ミャンマー)の国境地帯に住む山岳少数民族の信徒たちは、この問題についてどう考えているのでしょうか。彼らは天界に存在する祖先を敬う先祖信仰と自然界に存在する靈を畏れる精霊信仰を基本とする生活を送っていましたが、20世紀以降、キリスト教への改宗が急激に進みました。その半数以

上が改宗者となった部族もあります。中でもアカ族というグループの信徒たちは改宗したにもかかわらず未だに祖先を敬い、霊を畏れる祭祀を教会の行事として行います。さすがに祖霊の祭壇は捨てますが、先祖との絆を深め、維持する命名や宴での生贄、豊穰と子孫繁栄を祈る祭礼、牧師による呪術など正統派のクリスチャンにとっては理解しがたい風習を色濃く残しています。

彼らはイースターには私たちと同じように祝祭日としての礼拝を奉げます。礼拝後、皆で墓を掃除し、昼食会では豚を奉げ、歌や踊りを繰り広げる楽しい宴が深夜まで続けられます。たとえ牧師であっても先祖との因縁を否定することは無く、森の霊を畏れ、子孫の功德によって先祖が救われると考えています。したがって先祖を供養し、森の悪霊を鎮めるために、また豊作を感謝し、怪我や病気に遭わぬように、そして“死者の為に”讚美歌を歌い、祈りを奉げます。それを見た欧米の宣教師たちは、彼らが大切にしている先祖供養にキリスト教的意義を見いだすことはできません。したがって彼らの

固有の文化に合わせて教理を変容させようとは到底考えられず、対立や離別が起こることも珍しくありません。

宣教師たちはイエスが救い主であり、神であると信じているのがキリスト教だと教えました。しかしアカ族の信徒たちはイエスは偉大な人物だが、神をどう認識するかはもっと重要な問題の一つと考えました。精霊信仰もキリスト教も、教義のうえでは容易に互いを受け入れることは出来ず、他方を否定しなければならないのですが、彼らは神への理解が食い違っていたとしても、宣教師の言うことが正しいと思えば積極的に採り入れ、一方でキリスト教徒だから他の信仰を否定する、とは考えなかったのです。彼らは「誰が言ったことか」ではなく、「何が言われているのか」に注目する信仰者だったのです。このことは復活を祝うイースターを迎えようとしている私たち日本人に大きな示唆を与えていると考えます。

“信じなければ”ではなく“信じる”日々を、そして迷える子羊として全てをゆだねる日々を。今年もまた喜びと共に、感謝してイースターを迎えたいと考えています。

アカ族(タイ)で勘田兄撮影



宴を囲むアカ族の女性信者たち



生贄の豚を奉げるアカ族信者たち



病気の子を持つ信徒に呪術を施すアカ族の牧者

台風の日、地獄と天国、そしてまた地獄 …… 犬塚志朗



伊勢湾台風 犠牲者 5,098 人・負傷者 38,921, 阪神・淡路大震災が発生するまで、第二次世界大戦後の自然災害で最多、災害対策について定めた災害対策基本法は、この伊勢湾台風を教訓として成立したものとされている。

明治維新以来日本最凶と言われていた伊勢湾台風
に私は襲撃されました。忘れもしない 1959 年 9 月 26

日私が高校2年の修学旅行出発の前日でした。

当日夕方から宵にかけてだんだんと雨風が強くなり、やがて停電になり真っ暗の闇夜の中、ザザザザッと吹きつける雨の音、ビュービュー猛威を振るう風の唸る音、そしてミシミシと家の柱や鴨井、梁、長押(なげし)にひびが入る音。今にも家が倒れそうになりました。そこで両親を病気で亡くした我が家族は男だけの4人の兄弟、二階の物置に逃げ込みました。そこは人が入ったことのない埃(ほこり)だらけの、蛇やネズミの棲み処(すみか)。家のきしむ音、暴風雨でゆらゆら揺さぶられながら、25歳の長男を筆頭に、次男、三男(私)が弟(小学生)を中心に囲むように座り怖さに震えていました。次男(高3)は南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、仏になった天上の父母に加護を求めるように、ひたすら唱えて祈っていました。二人の兄に護られて私も不安に慄(おの)のいていましたが、なぜか弟は真中で平和そうにぐっすりと寝込んでいました。

2,3時間後、辺り一面静まり返りました。台風の『目』の中に入ったのです。早速私達兄弟4人は新築したての親戚の家へ避難に向かいました。辺りは物音ひとつしない空間の中、見上げれば晴渡った満天の星空、月が煌々と輝いていて屋根瓦や樹木、木の葉の雨露、水滴に反射していました。土砂降りの雨に世の穢(けがれ)がすっかり洗い流されて、天にも地にも宝石を鑲(ちりば)めた幻想の世界(天国?極楽?)にまぎれ込んでしまったかのようでした。でも世の中は甘くありません。周囲360度、大空の下方は怪しげな、どす黒色の入り混じる白雲が渦巻いていて、不気味に月光を反射していました。

『目』が通り過ぎ、再び生暖かい風と共に暴風雨が再開しました。が、私たち兄弟は避難先の新築の家で心地よく、雨風の音を聞きながらぐっすり寝入りました。でも夜が明ける頃、遠くからカンカンカンと半鐘の音。夢現(ゆめうつ)微睡んでいると「矢作川の堤防が切れるぞっ!逃げろ!!」消防団の人たちが大声で廻っていました。400mほどしか離れていない大きな川の堤防は屋根より高いのです。うす暗い夜明けにみんな山の方にぞろぞろと逃げだし始めました。着の身着のまま、

着替えの時間もとれず、恥も外聞も捨てて寝巻姿で歩いている人もちらほらいました。私たちは自転車で遠く、別の親戚の家に逃げ込みました。数時間後矢作川の堤防が下流で決壊しました。それで私達の地域は助かったのです。

台風一過、眩しい太陽の光を浴びながら、白昼、ぼろ着に長靴履いて羞恥心できまり悪そうに、顔を隠すようにして帰宅の途につきました。

当時の私の人生はこの台風と同じでした。地獄と天国、そしてまた地獄、天国の生活の繰り返しです。両親もなく、ひたすら親戚や兄達、中学時代の学校の教員、そして神仏に頼る以外にありませんでした。やがて大学に入学して宣教師に廻り合い、あとは導かれるまま受洗、人生観ががらっと変わりました。希望通りミッション系の学校に勤務することになりました。故郷から300kmほど遠く離れていて知人一人もない横浜で、頼ることのできるのは神様のみ。御加護の中、信仰の起伏を重ねながら無事定年退職、更に別の学校勤務にと、・・・46年の教員生活を終えて5年になります。

「処女降誕だって!!死んだ人が復活??この科学の進歩した時代に本当に信じているのか?」と、思っていました。今は使徒信条を、素直に告白できるようになりました。これが聖霊のお働きでしょうか。

厳しかった冬のあと、春風と共に地上の万物が蘇るこの季節にイエス・キリストの復活祭を迎えます。新生命漲る希望に満ち満ちた日々を過ごしたいものです。



緋寒桜

聖書をひもとく会



懇親会

